

## 第1回新宿区文化芸術振興会議（第6期）議事要旨

■開催日時 令和2年11月17日 午前10時から午前11時30分まで

■開催場所 新宿区役所本庁舎6階 第2委員会室

■出席者

委員 高階秀爾 垣内恵美子 星山晋也 川北彰子 松井千輝 的場美規子  
大野順二 中島隆太 大和滋（欠席 岡室美奈子 飯田直子）

\*敬称略、文化芸術振興基本条例に規定する分野別の順

事務局 菅野文化観光産業部長 小泉文化観光課長 原文化観光係長 加藤

■議事の進行

### 1 開会

会長選出までの間、事務局が会議の進行を務めた。

### 2 委員の委嘱

\*任期：令和2年9月9日から令和4年9月8日まで

### 3 区長挨拶

吉住区長が、会議の開催にあたり、挨拶を述べた。

### 4 委員の自己紹介

### 5 会長の選出

新宿区文化芸術振興会議規則第4条第1項及び第2項の規定に基づき、委員の互選により、全員一致で、高階委員を会長として選出した。

### 6 会長挨拶

高階会長が、会長就任にあたり、挨拶を述べた。

### 7 副会長の指名

新宿区文化芸術振興会議規則第4条第2項に基づき、高階会長が垣内委員を副会長として指名した。

### 8 議事

(1) 本日の進行は、次第によることを確認した。また、検討内容のとりまとめと資料として保存することを目的として、会議の録音及び撮影について、各委員の了承を得た。

(2) 「新宿区文化芸術振興会議の運営（進め方）について」

資料2に基づき、事務局が説明を行い、第6期の活動は資料のとおり運営することが確認された。

(3) 「新宿区文化芸術振興会議の調査審議事項について」

第6期の調査審議事項について、意見交換を行った。

(4) 調査審議事項について、専門部会で論点整理を行い、次回会議で審議することが確認された。

【以降、意見交換】

- 第6期について、コロナとの関係というのが、出てこざるを得ないと思う。現在、コロナ感染者数も第3波が懸念されているというのが日本の状況で、海外の状況はもっと激しくて、パリだと自宅から1キロ範囲内までしか動けないとか、またロンドンでもロックダウンということもある。アメリカはもっと激しい状況で、なかなか国際的な状況も考えると、コロナをどうやって乗り越えていくのかというのは1つ大きな課題なのかなと思う。
- 分野によって多少濃淡はあるが、舞台芸術に関して言えば、まさにその活動の場が蒸発して、今後どういう形で、入場制限をするのかしないのか、どういうパフォーマンスができるのか、まだ答えが出ていないというオンゴーイングな状況。
- 1つこのコロナでどのくらいの影響があり、またどんな変化があるのかということを見据えた調査研究は、ちょっと避けて通れないのではないかなと思う。
- マイナスの影響もあるが、ポジティブな影響というのか。今後につながりそうなところは、やはりオンラインでの配信とかオンラインでの参加、あるいはオンラインと合わせてハイブリッドなやり方での観客像。観客の定義にもよるけれど、サポーターとか顧客像とかは、ちょっと可能性を感じさせる部分もあるかなと思う。
- 第5期では情報発信について議論をしたが、これを発展させるということもありかなというのが1つ論点として、方向性がはっきり見えているわけではないが、避けて通れない部分かなと思う。
- 2点目は、やはり来年はオリンピック・パラリンピックが一応開催されるということがあるので、これまでもオリ・パラに向けた、あるいはオリ・パラの後のレガシーをどう確保するのかということも議論した。来年までちょっと時間をもらったと考え、もう少しコロナとの関係もあるので、両方合わせて、そういうベストミックスを探っていくということもありなのかなと思う。
- 非常事態宣言解除以降、そこまでは皆さんの多くはじっとしているという時間が続いた。6月、7月ぐらいから50%ということで再開されて、10月から100%観客オーケーという段階で、少しずつ動き始めた。
- 実演芸術というのは、体、技を使う芸術で、じっとしていると衰えてしまうという問題があって、いかに能力、あるいは表現を維持するかというのは非常に重要な問題で、50%になって以降、試行錯誤を続けながら再開を始めているという感じだ。
- 非常に実演家のマインドが、実演芸術の宿命というか、密の空間でやらざるを得ないということがあって、その中でどうお客さんと向き合っていくか、あと舞台上の感染を防

止するか、お客さんの防止ということで、皆非常に苦労して何とか試行錯誤している。ただ、申し上げたようにやり続けられないといけない分野だろうと思うし、国はいろいろ支援を打ち出してきていることはあるが、表現の場ということと、いかに区民と出会える場を作っていくかということが重要なことだと思う。

- やはり第6期というテーマで考えると、第5期で提案された情報発信基盤と企画連携という、多分もう一步具体化するような方向性の議論。
- 1つの点でオンラインという指摘もあるが、何らかの形で連携ないし情報プラットフォームを評価するための議論というのが、具体的なレベルでそろそろされなければいけないかなというのが1つ。
- もう1つ大きなテーマとしては、令和3年9月以降にまとめを作るということを考えると、やはりオリンピック後。そろそろコロナもいい加減にしてほしいという意味も込めて、コロナ後を見据えて、何らかの1つの今後の在り方を議論するという大きなテーマを考えたほうがいいのかと思うし、これはぜひ皆様のご意見をいろいろ伺いたいと思うし、そこら辺の大きな方向性が1個出せれば、この会議としてはいいのかと思う。
- やはりコロナの克服というのは避けて通れない。まだ1年たっていないが、ある意味我々が今までやってきていた当たり前を考え直すいい機会ではないかなと思う。
- ネガティブな部分とポジティブな部分があるという発言があったが、やはりオーディエンス、お客様という立場での変化、それから運営するファシリティというか箱ものということを考えてときからの変化、それからやはり箱ものに魂を入れる芸術家というか演奏家という、そういう3つの視点でコロナにいろいろな影響を受けている方がいて、実はこれが揃わないと、文化芸術の振興というのは成り立たないので、そういう意味で今、起こっているコロナというのは、よくよくそういう3つの視点で調査をした上で、これまでのこれを乗り越えて新しく生まれているもの、それから今までの例えば常識が違っていたのではないかなというものも含めて、何か新しい方向性を出せればいいと思う。
- もう1つは、やはり2年後にどういうふうになっているか分からないが、恐らく今よりも状況は改善されてきていると思う。
- オリ・パラとその後において、新宿区がまたこの2年いろいろと変わっていく兆しと言うか、この2年は特に新宿駅西口地域というのは、かなり大きく変わった。今まで10年活動してきたが、これからの10年を考えると、新宿駅を核とした10年というのは、非常に大きく変わってくるだろうと思う。
- そんなことも見据えながら、恐らくこれからオリ・パラ、その後も含めて、新宿区の核分裂の核、みたいなところが出てくるのだろうなと。それはとても大事なことなので、考えながら、そういう核を中心にどう新宿区の文化芸術を広めていくか、連携しながら広めていく視点も入れながら、オリ・パラ、またその後調査していくというのはとてもいいことなのではないかなと思う。
- コロナ後なのか、最中なのか、ウィズコロナなのか分からないが、後にはまだならないのではないかなと思うので、2年で完璧にコロナ後になるのかというのはちょっと疑問に思う。

- オーケストラ全体は大変な思いで、お客さんを100%入れていいが、やはりなかなか客層が戻ってきていない。お客さんがまだまだ怖がって、来ない状況。50%は上回っているだろうということだが、まだまだ、良くて6割というところ。
  - 世界を見ると、まだ日本のほうがコンサートを行えているので、いいところだと思うが、ヨーロッパだとドイツ以外のオーケストラはほとんど給料が出ていない。アメリカに至ってはもう解散しているというところがあるので、いかに文化芸術、音楽だけではなくて演劇も含めて、コロナ禍の中で、新宿区がどうやってリードして保護していくのか。なくなってしまうとまた再建するのが本当に大変なことなので、なんとか維持できるような状況で、何か手だてを考えられたらと思う。
  - 国もいろいろ支援をしているが、4月・5月・6月はとにかく休めと。秋以降に何かやったら、そのお金を補填しますよというところ。4月・5月・6月の演奏会を秋以降に全部移動しているわけなので、もうスケジュールはパンパンということもあり、こういうのもなかなかできないというのは実情で、何かうまい手はないかなと常に思う。
  - もちろん海外の招聘ができないというのが一番の問題である。やはり、それでも外国籍の方がいるが、グローバルな関係で海外とも交流しないといけないというところがあるので、その辺も見据えて何か提言できたらいい。リードしていくような。
  - 区長からお話あったように、どういうときでもやはり音楽は必要なのだと私も思うので、何か提言できればと思う。
- 
- コロナ禍では今まで議論してきたように、イベントにただ多くの来場者を増やすということだけではなくて、本当に人々の安全というのを最優先にしたイベントを考えていかなければいけないと思う。
  - ここ数日はコロナの感染拡大によって、ますます文化芸術のイベントに参加することを控える方というのはやはり増えてくるように感じる。ただ、第3波だからといって、イベントの中止や延期というのを考える前に、先ほどから話に挙がっているように、まずオンラインイベントはできないかということを考えていただきたいと思う。
  - 先月区長との意見交換の際に、新宿区はやはりオンライン会議も、またオンラインライブとかイベントに対しても若干取組が遅れているのかなという印象を受けた。早急に様々なコンテンツでエンターテインメントを提供していただきたい。
  - コロナ禍でよかった点というのも私自身感じた点として、例えば様々なライブコンテンツというのが非常に充実したことによって、今まで自分の興味がなかったものに対して様々な人がいろいろなものを家にいながら楽しむことができること。
  - それともう1点、美術館や博物館で、今まで来場者の規制をなかなかしなかったのが、ゆっくり美術鑑賞できるという機会が非常に少なかった。例えば上野の美術館で、ムンク展を見に行った時、ムンクの叫びの、肝心な、見たかった絵の前で、早く行ってくださいと流されてしまって、一番見たかったものがゆっくり鑑賞できなかった。それに比べて今は日時指定があるので、先日伺った SOMPO 美術館でもひまわりをじっくり見れたとか、そういったことが文化芸術を長く堪能できるという点では唯一よかった。
  - 来年はオリンピック・パラリンピックがある。それを踏まえていろいろな面から考えていかなければいけない。フィールドミュージアムとか、それぞれいろいろなイベントが

オリンピックに向けて様々取組をしていくと思うが、期間延長をしたりするとか、あと夜間までやるとか、コロナと共存しながらいろいろ考えていかなければいけないが、やはり早い段階でいろいろ考えていかないと、物事は動かないと思うので、その点を具体的にこの会議でも発言できたらと思う。

- この2年間はやはり新型コロナウイルスと、それから開催されるであろうオリ・パラのその2点がすごく重要なことになってくる。
- その背景を基にした上で、どうしてもなかなか決められないこともあるが、今まで決めてきた情報発信の整備については、どんどんもっと具体的にやっていってほしいなと思う。なかなかこうやらなければいけないとか、こうしたらいいというのが現実にならなくて、進めたことが必ずしも現実にはならない。いろいろと試行錯誤を繰り返しながら、このときにはこういうものというデータを確実に取っていくことは、すごく必要なのではないか。
- 新宿区が支援の取組を行ってくださっていて、それも実際にこれからいろいろなデータが上がってくると思うので、そのデータも確実に拾って、このコロナだけではなく、将来的にはまた別のウィルスも出てくる可能性もあるので、そのときに生かしていけるような、そういうベースを作ることがすごく大事ではないか。
- 大きな文化もちろん、音楽会や美術館もすごく大事だが、地域に根差したイベント文化というのもすごく大事で、それがなかなか行えないようになったので、その火も絶やさないように、何とか仕組みを残していけるように、と思う。
- コロナの影響というのは外して考えることはできないが、その中でやはりデジタル化をどう進めるかは、コロナの中であってより重要度が増している。
- セミナーやイベントとか開催することがあるが、やはり3月からもう一切そういうのができなくなったので、オンラインに切り替えてやっているが、最初の頃はかなりいろいろ戸惑うことも多くあった。講師の方も全く参加者の反応が見られなくてちょっと調子が出ないとか、かえって受けた人の満足度はどうなのだ、結構この半年ずっとそういうことをやってきたが、やはり経験が蓄積されるとそれなりに、大規模は難しいが、30、40人から40、50人ぐらまでの会合であれば、何とかいろいろみんなの満足度を上げながら開催することができるなというところまで来たと思っている。こういうノウハウ的なものというのを、新宿区内の団体の中で共有していくことというのは、これからすごく大事になってくる。
- 演者の練習が非常に厳しくなってきたというのがあるが、練習とかをどういう工夫でできるのかというのもうまく情報共有できれば、少しずつは何か解決につながる糸口が見えると思う。そういう意味で、デジタル化をどういうふうに取り入れていくかを、具体的に情報共有していくような活動も必要。
- この振興会議を5期にわたってやってきた成果として、新宿の文化を5つの地域に分けて捉えようとしてきた。落合とか四谷、神楽坂、新宿駅周辺。そういうふうな地域的にその中にある文化を考えようとしてきた。大きな考えのよりどころとしての成果があ

る。

- 新宿フィールドミュージアムをガイドブックの形で一覧できるようにしてきた。大変大きな成果だと思う。まず積極的にこれらを充実していく方向は考えにくいので、今までやってきたところを、どういうふうにコロナ禍で影響を受けているかという認識をしなければならぬ。特に音楽とか演劇とかスポーツ、そういう分野が大きな変化を求められるというか、大きな問題を持っている。
  - 一方、そうでない地域文化財はまだ影響を受けなくて、歴史的文化財というものは残っている。そういうものを新宿フィールドミュージアムの中に取り入れていくことも考えてもいいのではないか。
  - 新宿にはこういう歴史的文化財があるというようなことも、このフィールドミュージアムの構想の中に取り入れていったほうがいいのではないかと。そういう意味で、現状の状況の認識とフィールドミュージアムのガイドブックをどうするかということを考えていくことが、今の段階でやったほうがいいと思う。
  - コロナ後を考えるのは難しいが、コロナ後ということも常にどうなのだろうかということも考えていかざるを得ないし、いくべきだ。
  - それからそういう中で、オリンピックがどうなるかわからないが、外国人の問題。これはオリンピックがあってもなくても、新宿の文化を考えるときには考えていかなければならないだろうと思う。
  - 先ほど言った歴史的文化財とフィールドミュージアムのガイドブック作成に当たっては、大変文化観光課の事務方が大変だろうと思うが、そういうデスクでできる仕事というものも何かあるのかということも考えていったほうがいいのではないかと。
- 
- 我々が考えるとき、特にパフォーマンスアート、美術の場合、作る人と受け手、演者と観客というように、この関係が特にコロナの場合非常に重要。
  - フィールドミュージアムの場合には演者と観客というよりも、参加者が全部演者であり観客。人間の文化芸術活動というのは、どちらかだけでももちろん中心がある場合もあるが、両方が参加する。お祭りなんかもそうかもしれない。
  - そういう形で芸術文化というものは重要な役割がある。フィールドミュージアムは、それを随分やっていたのだと思う。コロナ禍の場合にそれも続けていく。
  - お祭りなんか当然だが、歴史的な場所、地域が区の中にあって、地域的な特性ができてくる。
  - その地域的な特性もまた歴史的に変わってくることもある。大体東京自身が山手と下町というのを分けるのが、これは江戸時代にはむしろ下町のほうが中心で、これ水運があったから。文化のものを運ぶとか日本橋辺りも全部船で物を運んできた。それが近代になって全部下屋敷、浜屋敷というのがいまだに残っているところが観光地になっている。
  - 明治に入ってからコレラの発症で、これが水、水道のせいだということで、みんな水辺から逃げ出す。大名、それは華族になったり。山手のほうに移るとというのが東京のつまり変化の非常に重要なポイント。これ、前からの東京の文化地域であったり。それ以後水辺の運河やなんかみんな埋め立てられてしまって、特に市民たちの場所が山手に移ってということが出てくる。つまり地域的な特性がいろいろ動いていく。

- お祭りが、神田まつりにしてもあるいは佃島にしても古いものは水辺に残っていくというようなことが、文化芸術にとっては大変重要なポイント。
  - 芸術あるいはそれが続くというのは、要するに歴史的に我々のアイデンティティをつなげること。それを一体どういうふうに。神楽坂というのも我々何となく心のどこかで小料理屋さんが出るような場所というイメージが。もともとは伊勢を礼拝するための場所であった。宗教的な意味を持った場所が今も残っている。というような地域的な特性が、時代とともにもちろん変わっていく。
  - これまでいろいろ歴史的な遺産で残っていくもの、その意味というのは実は重要な問題、一次的なものではなく。
  - そういうものも含めて、会議として、例えばいろいろ行政のほうにも要請したいし、我々もどういう形でやっていくか。それはいろいろ考えていかなければいけない。この2年間の審議のテーマとしては大変重要な問題になろうかと思う。
- 
- 中野区の盆踊りは、コロナ禍で開催するかどうか危ぶまれたときに入場制限をした。入場される方は有料で、あとはオンラインで配信する手を取っていた。
  - 秋だと文化祭シーズンで、中学校、高校、大学もオンラインで文化祭をしていた学校はたくさんあった。実際見に行かないのは寂しいが、中止にするよりはバーチャルの世界で触れ合えるという点では、文化芸術を衰退させないで済む。
  - この夏は中止になってしまったが、夏休みこども文化体験プログラムを、Zoomで開催できれば。やはり日本舞踊はそんな音も立てるような動きのあるものではないので、パソコンの画面で先生の動きを見ながら、例えば小さいお子さんだったら隣にお母様とかいて、動きを一緒に教えてあげる。
  - 今後も何かウェブ会議のシステムを使いながら。フィールドミュージアム2019のオープニングイベントの団扇づくりで、妖怪の絵を描いた。団扇を事前に、例えば希望者に配布するかどうかというのはあるが、例えばZoomを使い、講師の方がいて一緒に自宅にいながら楽しめたりとかもできるので、様々な考え方によっては、いろいろなことをできる機会でもあるのかなと思うので、その点をちょっと検討してほしい。
- 
- 明らかにデジタルの特性を生かして伝えられるものがあるだろうから、それをどういう形でやっていくかという問題。
  - お子様を観客というか参加者という、フィールドミュージアムもそうで、いろいろな人がいるわけで、外国の人もある。普通のお客さんとまた違うということがあって、それに対する我々の対処の仕方、これも考えていくことは、重要なポイント。だからその辺のことも、これどういう形で審議事項にするか、後でいろいろ考えたい。
- 
- 伊勢丹でも今年浴衣の売上が劇的に減ったということで、オンラインで盆踊りをして、そこそこ盛り上がったという話を聞く。それから子どもの指導においては、俳優の山田孝之さんが実際に演劇塾というのをして、親子対象で、オンラインで行って、それがとても好評だったというそんなニュースもあった。
  - オンラインはとても便利だなと思うところもある一方で、その場所に行かないと味わえ

- ない感覚でしたり、その場所の雰囲気でしたり、またはほかの方と関わることによって生まれるものというがあるので、オンラインを進めることはとにかく大事だが、両輪でいくということが大事。オンラインといってもちょっと取りこぼされてしまう方たちもいるから。
- 両方とも両建てでいかにうまくやっていくかというのが、すごく大事な議論になるのではないか。
  - 人間的なつながりは大事。どうしても、機械だけではない。しかし、人間的なつながりがあると感染リスクで危なくなる。その辺をどうやって整備をしながらやっていくか。文化芸術にとっては大きな問題。
  - オンラインは確かにすごく人を集めることはいろいろできると思うのが、一方で主催者側からすると、それをうまく課金ベースに乗せていくというのが非常に難しい。
  - そのこのところを一番ベストマッチングがあるのかなというのはすごく考える。
  - 参加する人は無料であったり、あるいは非常に低額であるとどんどん入ってきて、ただ、入るのも気楽なので当日キャンセルも非常に多かったり等、さらに一歩進んだ課金の金額がどの程度が適正なのかということも非常に悩む。
  - うまく折り合いつけていかないと、活動している団体や個人の方にとっては、今後の生活が成り立たないということにもなるので、その辺りも何かうまく進める方策があるのか。
  - オンラインで配信し、オンラインに参加者を限って課金する。お金の問題、入場料を取る。その場合にどの程度でやるのか、あるいはやり方。
  - オンラインで全部に向かって開かれるというのがあってもいい。そのやり方、パフォーマンスアーツも実際に劇場に行き、音楽会に行くときには当然お金を払う。コンサート、お祭りなどに参加するには別に払わないわけで、それで参加するというのも重要である。
  - フィールドミュージアムの場合にはそうではなく、準備したり、当然マンパワーもいるし、施設もいるし、それを経済的に支えることは重要だと思う。
  - もちろん行政のお力も借りたいし、我々もそれを考え、デジタル化する場合の問題。やはり資金がどうしてもいる。しかし、資金集めも逆にそれでできるかもしれない。
  - やり方としてこれ考えていく、特にコロナ禍の時代に考えていくべき問題。
  - オンライン化は、非常に難しい問題でバランスをどう取っていくか。このコロナ禍の中で、大阪の上方落語協会というのは寄席を1軒持っていて、6月からオンライン配信を始めた。当初はお客さんがつく。だんだん飽きられてくるというのがあって、3カ月たつともうお客さんがあまりオンラインで見なくなるという問題。もう一方で乃木坂の卒業式か、1日だけで20万人が見るといような非常にそういうアンバランスなことが起こる。多分淘汰がいろいろ進むのかなと。オンラインということが出てくると。
  - 今まで技術革新でレコードが生まれたとき、映画が出てきたとき、あるいはLPレコー



ドになったときというのは、それまであった芸術を利用するのだけど、全くメディアに適した芸術が生まれるという構造があって、変わる。古いものも残る。

- そういう大きな節目で、大体今までメディアはコンテンツにしてきたという問題がある。コンテンツではなくて生で配信するという。
- どういうふうに変化するのかというこの見極めが非常に難しい。プロフェッショナルとして。
- 本当に収益を得るといのは、全部を得ることは不可能に近くて、ほとんど見られないという場合もある。だからこの辺をどうしていくかということで、試行錯誤するという意味で、いろいろなことを先ほどのノウハウの共有という問題もある。
- 例えば新宿で支援したところが集まっているいろいろな今後の展開を考えていくとか、どういう在り方があるかという議論は必要。
- いろいろ実験しているが、無料配信、アーカイブ配信、ライブ配信で課金してみたり。いろいろやっているが、なかなかそう簡単なものではない。
- やるコストをどう賄うとか、出さないと成り立たないという問題が非常にある。これは長期的な試行錯誤が必要。

• 具体的にフィールドミュージアムの成果とこの間の検討成果を見て、地域の変化を考えると、新宿区の場合、東口から西口に文化の軸が変化するような展開も含めて、面白い展開がフィールドミュージアムの成果を受けて考えられないのかなという具体的な話と、新宿のまちの発信力を高めるとい意味で、そんな展開を少し考えてもいいのかなとか、そういうデジタル化のことと、そうではない祭的な新宿の魅力を創出していく1つの手だてというのが何かありそうな気もしていて、ぜひもうちょっと議論を重ねて、来年以降の具体的な何かが作ればいい。

- 外国の方がオリ・パラでどっと来るはずで、どうなるか分からないが、今までも外国の方にどう情報発信し、なおかつ参加してもらえるように。実際の行政でも例えば多言語による案内を出すとか、それも印刷媒体だけではなくて、案内もするという形のいわゆる観光案内みたいなものの充実も十分ある。
- 例えばフィールドミュージアムなどに参加してもらうときにどうするか。それから伝統芸能にお客さんを、外国の方を呼ぶときにどうするか。これは従来の能や歌舞伎に中身を横文字で一応解説を作ったり、あるいは実際に舞台のセリフに合わせて、横文字を作ってそれを聞きながら舞台を見てと、いろいろなやり方があると思う。
- そういう古いものも活かしながら、その場合にデジタルの技術はいろいろプラスになる。同時に、その場で伝えなければいけないということは大変大きな問題。地域の問題。特に外国との、つまり異文化との連携ないしは伝達。これはもう非常に大事で、そうでないと妙な文化摩擦が起こったりなんかすることがある。
- パリで、コロナ以前に、日本文化会館で、日本の様々な展覧会やお茶やなんかもやるし、そして舞台があって、歌舞伎、小さい舞台だがいろいろな紹介をやって、大変評判になったことがある。
- 歌舞伎のときに勧進帳もやったし、それから寄席ものもやった。面白いのを幾つかやっ

た。フランスの観客には何が面白かったか。一番面白かった、興味を持ったのは口上であると。たまたまそのときに松本幸四郎が、要するに口上を、ずらっと並んで襲名披露をやった。そんなこと向こうで考えられない。それを舞台上、もうあれが大変面白い。今の名前の問題。名称という問題。これは文化的な伝統だと思う。

- 外国の方にそれを宣伝。それはそれで意味があるのだということを、つまり歴史的な背景。
- 人間が歴史を大事にし、かつ名前を大事にするというようなことを、日本の文化では非常に重要なポイントになっているということも、私は、そのとき初めて気づいた。伝統と思った。そう言われると、襲名って一体何なのだという。いや、海老蔵が團十郎になる。でも、名前をどうして変えるのだと言うのだが。それが演者にとっても、それから見る人にとっても意味がある。同じ人だけれども別のものになるのだということ。それが非常に面白い。
- ヨーロッパでは名前を継ぐということはありません。単にバックナンバーとしてルイ16世とかなんとか同じ名前を区別するのはあるが、それを偉い人がいるから変えるというようなことはありません。日本の場合にはそこが中身も変わらなければいけないよという話になる。それは面白い文化現象。
- そういうことも特にこれ外国の方がいろいろやってくる場合に、文化の中に、物珍しさももちろんある。物珍しさだけではなくて、文化の持っている歴史的な意味、そこで実際に分かってもら。我々もそういうことも考えるということが大いに出てくるだろう。

## 9 専門部会の設置及び専門部会員の指名

新宿区文化芸術振興会議規則第6条の規定に基づき専門部会の設置が決定され、同条第2項の規定に基づき、高階会長が、垣内副会長、大和委員、中島委員を専門部会員として指名した。

## 10 事務連絡等

第2回目の会議は、2月～3月頃に開催予定とし、日程や会場等については、別途事務局から連絡することとした。

## 11 閉会

会長の挨拶をもって、午前11時30分に閉会した。